

発達障害児への学習及び対人関係支援が大学生の 自己効力感促進に及ぼす影響

—ネスティングの場の継続的な支援の成果—

金平希^{*1}，堤俊彦^{*2}，米倉裕希子^{*3}，岡崎美里^{*4}，三村幸恵^{*4}

(^{*1}心理学科 ^{*2}大阪人間科学大学人間科学部

^{*3}関西福祉大学社会福祉部 ^{*4}福山大学人間科学研究科)

本研究では、継続して発達障害児にボランティア活動を行っている大学生（継続群）と、単発的なボランティア活動の経験のある大学生（単発群）の比較を通じて、ボランティア活動の動機付けとその効果を測定することを目的とした。分析の結果、援助成果、援助効果、社会効果、ボランティア活動継続動機の全てにおいて、ボランティア単発群と比較して継続群の平均値が高い値を示し、援助効果以外の多くで有意な差が示された。また、愛他的精神の高揚といった援助成果とボランティアを継続する動機付けの高まりとは関連する可能性が示唆された。さらに、継続群は、発達障害児へのボランティア活動を通じて、支援に対する自己効力感の高まりや自らのスキルの向上、自己成長を感じている可能性が示唆された。

【キーワード 大学生，ボランティア活動，自己効力感，自己成長】

近年、教育の場においては、社会性発達の機能不全に伴う対人交流やコミュニケーションの問題を抱えている子どもが目立っている。とりわけ、高機能の発達障害児においては、知能の障害や言葉に遅れがないため、一見ではその特性がわかりにくい。そのため、適切な特別支援の必要性に気づかれることもなく、健常児と共に通常のクラスで教育を受けているケースが多い。しかし、社会性に重度な障害を抱えることが多い高機能発達障害児は、何の支援もなく健常児と同じ（インクルーシブな）状況において教育を受けるだけでは、仲間との対立が生じやすく、その結果孤立を招き、社会性の発達が妨げられるケースも多い。このような問題に対して、いまだインクルーシブ教育の体制が整わない現状では、発達障害をもつ児童のより早期の発見及び早期介入により、地域において支援を行うコミュニティケアの必要性が認識されつつある(本田，2013)。

近年、コミュニティケアの一環として、仲間関係が苦手な児童への社会適応の向

上や対人関係促進を狙いとした、学生ボランティアによるさまざまな支援活動が展開されるようになってきた。もとより、大学生にとって地域でのボランティア活動は、主体的な学びと成長における重要な構造化された機会である（河井，2012）。さらに、社会性の障害のある子どもと接触経験し、より良いコミュニケーションをとろうと試みる過程は、自らのコミュニケーションスキルや社会性を高める機会になっている可能性がある。その結果、発達障害児へのボランティア活動は、学生自身が多くスキルを学び、かつ自己肯定感や対人場面の自己効力感が高まる機会になっていると思われる。一方、支援を受ける子どもにとっては、大学生が関わることで、社会性に乏しい行動でも受け入れてもらえやすく、また良い行動をとったときにすかさず褒めてもらえるなど、安心して活動に参加することができる。こうしたボランティア活動は、子どもにとっては、地域におけるネスティング（本田，2013）としての場の確保に繋がるため、大学生と子どもの双方にとってメリットが高いといえる。このような関わりによるネスティングの場の確保は、継続的な支援活動を行うことにより、地域支援としての効果がますます高まることが期待できる。しかし、継続的なボランティア活動の効果については実証的な検討が十分になされていないのが現状である。

そこで本研究では、発達障害児を対象に継続してボランティア活動を行っている大学生と、単発的なボランティア活動の経験のある大学生の比較を通じて、ボランティア活動の動機付けとその効果を測定することを目的とした。その際、特にボランティアを継続している大学生の自己効力感に注目して検討することとした。

研究方法

1. 調査参加者・期間

調査参加者は、地方私立大学心理学科に在籍する 3~4 年生であり、発達障害児のボランティアに 1 ヶ月 4 回以上継続的に参加している 9 名（男性 3 名、女性 6 名）と（以下ボランティア継続群）、ボランティア経験が 5 回以下の 13 名（男子 8 名、女子 5 名）であった（以下ボランティア単発群）。調査期間は、20XX 年 9 月下旬~10 月上旬であった。調査参加者に個別に質問紙を配布し、記入を求めた。

2. 発達障害児へのボランティア実施概要

主に、学習支援とソーシャルスキルトレーニング（Social Skills Training；以下 SST）を実施した。学習支援については、基本的には週に 1 回（第 1・3 週は約 4 時間、第 2・4 週は約 2 時間）、大学生がそれぞれ担当の発達障害児に個別で約 1 時間実施した。学習支援の構成は、最初に 30 分を基本とする学習を行い、残りの時間は対人交流促進のためのゲームの時間とした。なお、ゲームの種類に関しては、コミュニケーションを重んじる視点から、机の上で対面で行うことができるボードゲームを基本とした。

SST は、月に 1 回（約 2 時間）計 13 回を実施するプログラムで、発達障害児らを学年により 10 名程度の小集団に分け、1 つの集団につき約 5 名の大学生が担当した。毎回 1 名がメイントレーナーとして児童に対するファシリテーターの役割を務めた。残りの大学生は、サブトレーナーとして、適宜、指導や支援の必要な児童へ個別に関わることによりメイントレーナーをサポートしながらトレーニングを進めた。大学生は、上野・岡田（2006）などを参考に、事前に保護者にソーシャルスキルについての評価を実施し、その結果を参考に 6 回分のめあてと概要、目標を決め、全体の見通しを立てて実施に臨んだ。なお、学習支援と SST の実施場所は、それぞれ地域の市の施設を利用した。

3. 調査内容

1) 援助成果測定尺度；妹尾・高木（2003）により作成され、「愛他的精神の高揚」、「人間関係の広がり」、「人生への意欲喚起」の 3 つの下位尺度で構成されてい

る 11 項目を使用した。それぞれ、「愛他的精神の高揚」とは、援助経験がもたらした向社会性の芽生えと活動実現の実感、「人間関係の広がり」とは、ボランティア活動を契機とした人と人との好ましい触れ合い、「人生の意欲喚起」とは、やりがいのある、充実感を味わえる目標が出来たという自己のポジティブな内容変化であった。

2) 援助の効果認識；援助効果を“自分の活動が、対象者の役に立ったと実感した”，社会効果を“自分の活動が、社会にとって有益であったと実感した”と定義し、その程度を尋ねた。

3) ボランティア活動継続動機測定尺度；妹尾・高木（2003）により作成され、「自己志向的動機」、「他者志向的動機」、「活動志向的動機」の 3 つの下位尺度で構成されている 16 項目を使用した。それぞれ、「自己志向的動機」とは、ボランティア活動を活用してのボランティア自身の成長や充足を求めた動機、「他者志向的動機」とは、他者の幸福・安寧など他者志向的な動機、「活動志向的動機」とは、活動を契機として社会との関わりや人間関係の維持、展開を求めた動機であった。

なお、1)～3) については、「まったくあてはまらない」（1 点）～「非常にあてはまる」（5 点）の 5 件法で回答を求め、得点が高い方がそれぞれの傾向が高くなるよう得点化した。

4) 自己効力感；発達障害児へのボランティア継続群のみ、学習支援と SST を通じた活動から感じた「子どもとの関わり」、「子どもについての理解・考え方」、「子どもから学んだ事」、「自分自身の変化・成長」についての自由記述を、自己効力感としてまとめた。

4. 倫理的配慮

実施については、調査対象者に、調査は自由意思による参加であり、本調査で得られたデータは、学会発表もしくは学術論文として公表することがあるが、集団データとして公表されるために個人が特定されないことを書面で説明し、回答により同意を得たとみなした。

結果と考察

1. 各変数における平均値、標準偏差ならびに性差と学年差の検討

各変数のボランティア群別の平均値と標準偏差，ならびに各変数得点のボランティア群における差異を t 検定により検討した結果を Table1 に示した。

援助成果，援助効果，社会効果，ボランティア活動継続動機の全てにおいて，ボランティア単発群と比較して継続群の平均値が高い値を示した。

また，援助成果の中でも“愛他的精神の高揚”および“人間関係の広がり”で有意な差がみられた。これより，継続群は，発達障害児のボランティア活動を通じて，人や地域に貢献しようという意識の高まりや，長期間に渡り活動を継続していく中で児童や親，ボランティア仲間との情報交換などの機会を通して，地域における人間関係の広がりを感じとっていると思われる。

一方，援助効果・社会効果については，継続群と単発群の間に有意な差は示されなかった。しかし，平均値より，継続群はいずれも 5 段階評定の 4 であり，自らの活動が対象者や社会にとって効果があると感じていると思われる。また，妹尾（2008）が行った若者のボランティアに関する研究では，対象者の多くが福祉領域のボランティア活動を一日もしくは数日間経験した大学生であったが，援助効果・社会効果はいずれも 3.64，3.28 と本研究の単発群と同程度であった。これより，ボランティア活動の援助効果認識については，1 日もしくは数日間の経験であっても得られやすいものと思われる。

ボランティア活動継続動機付けについてはすべての下位尺度で有意な差がみられた。これより，継続的にボランティアに参加することで，よりボランティア活動への動機づけが高まることが示唆された。

Table1. 各変数における平均値，標準偏差ならびに群間差の検討

		継続群 (N=9)	単発群 (N=13)	t 検定
援助成果	愛他的精神の高揚	3.92	3.40	2.17 *
		(0.53)	(0.55)	
	人間関係の広がり	4.19	3.44	2.83 *
		(0.50)	(0.68)	
	人生への意欲喚起	3.52	3.31	0.50
		(1.30)	(0.67)	
	援助成果 合計	4.02	3.39	2.80 *
		(0.45)	(0.56)	
援助効果	援助効果	4.00	3.62	1.10
		(1.00)	(0.65)	
	社会効果	4.00	3.46	1.42
		(1.00)	(0.78)	
動機付け	自己志向的動機	3.93	3.48	2.58 *
		(0.49)	(0.34)	
	他者志向的動機	4.17	3.64	2.30 *
		(0.58)	(0.49)	
	活動志向的動機	4.13	3.37	3.57 *
		(0.53)	(0.47)	
	活動継続動機 合計	4.08	3.51	3.27 *
		(0.48)	(0.35)	
* $p < .05$				

2. 各変数間における相関係数

本研究の各変数間におけるボランティア群別の Pearson の相関係数を Table2 に示した。まず，ボランティア継続群について，ボランティア援助成果のなかでも“愛他的精神の高揚”はボランティア継続動機の下位因子全てと正の相関を示した。また，“人間関係の広がり”は活動志向的動機付けのみと正の相関を示した。すなわち継続群では，発達障害児へのボランティアの援助成果の中でも特に，人や地域に貢献しようという認識の高まりである愛他的精神の高揚と，ボランティアを継続する動機付けの高まりとが関連している可能性が示唆された。また，ボランティアによ

る人間関係の広まりはボランティアの活動事態に対する動機付けと関連する可能性が示された。妹尾（2008）は、ボランティア実施者は、ボランティア活動の経験を通じて援助成果を得ており、援助成果を得るほどボランティア活動継続が動機づけられることを明らかにしている。つまり、活動自体が自発的な意志決定によるかどうかに関わらず、ひとたび活動に参加し、その活動を通じて自らの行動の役立ちが実感できれば、活動に満足し、以後のボランティア活動が継続されやすくなることを示唆している。このように大学生は、発達障害児にボランティアを通じて継続的に関わることで、社会や人に貢献することの重要性の認知が高まり、役に立つことができたと認識し、また、対象者への新たな目標ができたといった成果を感じ、そのことによりさらに継続的に関わろうとする動機付けが高まる可能性が示された。

次に、単発群について、ボランティア成果のなかでも“愛他的精神の高揚”と“人生への意欲喚起”は、ボランティア継続動機の“他者志向的動機”と“活動志向的動機”と正の相関を示した。すなわち、継続群と同様に愛他的精神の高揚とボランティアを継続する動機付けの高まりとは関連する可能性が示唆された。一方で、長期間発達障害児のボランティアに参加している継続群と比較し、1日や数日間のボランティアの経験の援助成果では、自分の持っている知識や技術を使う練習や生かすことができるといった“自己志向的動機”には結びつきにくい可能性が示唆された。よって、ボランティア活動により学生自身の成長や充足を求めるといった動機付けを高めるためには、継続的なボランティア活動による援助成果の経験が望まれる。

Table2. 各変数における Pearson の相関係数

要因	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 愛他的精神の高揚	—	.60	.09	.47	.47	.70**	.68**	.85**
2. 人間関係の広がり	.65*	—	.00	.06	.06	.24	.29	.75*
3. 人生への意欲喚起	.79**	.61*	—	.51	.51	-.03	-.17	-.22
4. 援助効果	.12	.47	.36	—	1.00**	.56	.61	.33
5. 社会効果	.16	.33	.34	.55	—	.56	.61	.33
6. 自己志向的動機	.48	.47	.47	-.16	-.21	—	.88**	.60
7. 他者志向的動機	.68*	.37	.66*	.14	.25	.03	—	.64
8. 活動志向的動機	.84**	.44	.67*	-.11	-.05	.50	.74**	—
注. 右上は継続群, 左下が単発群を示す。								
**p<.01, *p<.05								

2. 大学生の発達障害児への支援に対する自己効力感

ボランティア継続群のボランティアの経験を通して得た成果（自己効力感）についての自由記述を Table3 に示した。4 つの観点「子どもとの関わり」、「子どもについての理解・考え方」、「子どもから学んだ事」、「自分自身の変化・成長について」から回答を求めたが、内容が重複していたため、自己効力感として1つにまとめた。

自由記述の結果より、発達障害児へのボランティアを継続している大学生は、子どもとの関係向上はもとより、自らの支援方法や技術の向上や子どもへの理解や対応が高まったと感じていた。支援方法や技術については、子どもの視点に立った、子どもの能力や現状に合わせた対応や、具体的な声かけ、個人にあった支援法の実践ができるようになったと感じている者が多かった。また、実際に発達障害児に継続的に関わることで、障害特徴や対処の理解ができたと感じている者も多かった。さらに、少数ではあるが、保護者との関わりの上昇について感じている者もいた。一方で、自分自身の変化や成長についての意見もあり、発達障害児へのボランティアを通じて、自らのコミュニケーション力や社会性の向上にもつながったと感じていた。

以上のことから、大学生は継続的なボランティア活動を通じて、発達障害児との接触経験により、支援に対する自己効力感の高まりや自らのスキルの向上、自己成長を感じている可能性が示唆された。さらに、このことが学生にとってボランティアへの動機付けおよび継続につながると考えられる。今後は、大学生ボランティアによるネスティングとして場の確保という観点から、より詳細にその効果を検討していく必要がある。

Table3. ボランティア継続群の自己効力感の自由記述

カテゴリー	内容例
子どもとの関係	上手くコミュニケーションがとれるようになった。
	信頼してもらえるようになった (2)。 など
支援方法・技術	子どもの目線で物事を見極め、子どもに接するようになった (6)。
	具体的な声かけや支援ができるようになった (5)。
	一人一人に合った支援・対応を考えて実践できるようになった (4)。
	時間内に勉強と遊びのメリハリをつけてあげられるようになった。
	支援法を随時見直したり、子どもの状況を親に聞いて考えるようになった。
	宿題の教え方や勉強の教え方のバリエーションが増えた。
褒め方のバリエーションが増えた。 など	
子どもへの理解	障害の特徴や対処が分かった (6)。
	一人一人の違いや子どもの様子が分かるようになった (3)。 など
保護者との関わり	保護者の方々からの意見を聞いたり、子どもの行動についての相談が出来るようになった。
	保護者の方々の思うことと子どもの思うことを理解できるようになった。
自分自身の変化	コミュニケーション力が向上した。
	子どもと関わることで自信がついた。
	待てるようになった。
	怒ることやイライラが減った。 など

文献

- 本田秀夫 (2013) . 子どもから大人への発達精神医学—自閉症スペクトラム・ADHD・知的障害の基礎と実践— 金剛出版
- 河井 亨 (2012) . ボランティア活動への参加によって学生の学習がどう異なるのか—全国大学生調査の分析から— ボランティア学研究, **12**, 91-102.
- 妹尾香織 (2008) . 若者におけるボランティア活動とその経験効果 花園大学社会福祉学部研究紀要, **16**, 35-42.
- 妹尾香織・高木 修 (2003) . 援助行動経験が援助者自身に与える効果—地域で活躍するボランティアに見られる援助成果— 社会心理学研究, **18**, 106-118.

The impact of volunteer experience to support children with developmental disorders on self-efficacy in college students
-outcome of continuous volunteer work in community nesting setting-

Nozomi Kanehira, Toshihiko Tutumi, Yukiko Yonekura,
Miri Okazaki, Sachie Mimura

This study examined the effects of the experience on college students who volunteered to support children with developmental disorders. Self-efficacy was assessed for 9 students who volunteered to continuously participated in a learning and communicating program to support children who have difficulty learning and communicating due to developmental disorders. Additionally, helping effects for helpers and motivation for participating volunteer work were compared with 13 college students who had limited volunteer experiences.

Results showed that continuous volunteer work appeared to raised students' motivation to maintain participation in helping activities. Findings also suggest that continuous support for children with developmental disorders may have made students recognize improvements in perceived self-efficacy.

Further, college students who continuously do volunteer work with children who experience difficulties in learning and communicating may have improved their supporting skills their self-growth.

【Key words : college students, volunteer work, self - efficacy, self-growth】